

ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

エイムズ唯子



第8回「ごめんなさい」と言えなくて

彼女と初めて会ったのは、進学のための準備のため、おじいさんに連れられて高校へ面接に来た時でした。個人教育カルテをおじいさんと確認していると、センサーが反応して教室が暗くなったので、いつものように鍵束をジャラジャラと振って、電気を点けました。そのとき、大きな目をくるくると見開いて、「なんてすてきな魔法なの？」といたげな笑顔でこちらを見ていたのが、シャーリーでした。

シャーリーは、難病に指定されている「ソトス症候群」を持って生まれました。遺伝子の異常のため、体が過剰に成長するとともに、知的な遅れがみられます。シャーリーは、読み書きは比較的こなせますが、数学の概念や操作の理解が難しく、同級生が二次関数を解いているときに、「 $(-3) + 2 = \square$ 」とにらめっこ。「正と負の数の足し算は、絶対値が大きいほうから小さいほうの数字を引いて、大きいほうの数字についている記号をつける」という一連の手順がどうしても覚えられないのです。数学の先生と相談し、数直線を使って視覚的に解くことを目標にしてから、やっと学習が進み始めました。

たとえば因数の展開。 $(X-5)(X+3)$ を解くためには、まず $X^2 + 3X - 5X - 15$ に展開したのち、 $3X - 5X$ を解いて、 $X^2 - 2X - 15$ が導きだせなければなりません。

わたし「 $+3-5$ 、はこのあいだやったね？」

シャーリー「(数直線を指で辿りながら)ネガティブ2(-2)？」

わたし「そう。それでね、エックスっていうのは、グループの名前みたいなものと考えてみて」

シャーリー「クラン(氏族)みたいな？」

わたし「そうそう！ $3X$ と $-5X$ は、同じクランの人で、集まって会議を開くんだよ。意見を出し合って、結論を出すのよ。このクランのミーティングの結論は、 -2 ね。そのあとに、クランの名前も書いておくの。なんていうクランだったっけ？」

シャーリー「エックス・クラン！」

わたし「そう、だから $-2X$ 、と書いておこうね」

シャーリーは、両親を亡くして祖父にひきとられるまで、弟とともにあちこちの里親を点々としてきた過去がそうさせるのか、うそをついて関心をひこうとしたり、小学生をいじめて泣かせたり、ひとを傷つけても平気な顔をしていることがあります。

ある時、シャーリーが怖い顔をして、ピストルの形に立てた指を、わたしの背中にむけているのを見たとき、4年生のセーラが泣きそうになりながら教えてくれました。「そんなことしてない」とわたしに言ったシャーリーは、カウンセラーとの面談では、ふざけただけだった、と弁明したそうです。

シャーリーのえくぼに再び笑い返せるようになったのは、ナバホ語には、謝罪にあたる言葉がないのを思い出したからです。しいてあげるなら、「自分には非がないけど」という意味あいの「オーディッシネ」、あるいは「アードピキェアクウンアッヘ」(悪く思わないでね)が近いけれど、とナバホ語の先生に教わったことがありました。シャーリーがごめんなさいと言えなかったのは、そのどちらもぴったりこない、と思ったからだったのかもしれない。



このあと、しばらくしてから、シャーリーが「Thank you for that you do for me」(原文のまま)のメッセージを添えてプレゼントしてくれたビーズの青いブレスレット。